281 スーユニ・プット

特 241
64

斷絶後の蒋軍閥を軍部はどう膺懲するか

大木喬夫著

御前會議後の新動向

10セン

0055418000

0055418-000

特２４１－６４

断絶後の蒋軍閥を軍部はどう膺懲するか

大木喬夫・著

トップ・ニュース社

昭和１３

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特241
64.

帝國圖書館藏

大木喬夫著

斷絶後の蔣軍閥を軍部はどう膺懲するか

東京・トップ・ニュース社・發行

昭和十三年・帝國圖書館・藏

―目　次―

一、南京陥落後の新戰局……（三）
二、大本營設置と對支根本方針……（九）
三、長期抗戰とは何か……（一六）
四、英ソは日本と正面衝突するか……（二五）
五、戰はこれからである……（三〇）
六、聖斷遂に下る……（三五）

一、南京陥落後の新戰局

南京陥落とそれに引續いて行はれた杭州の占領は、日支事變に一大界線を劃すものであつた。これによつて事變は新らたなる、そして更に困難な段階に入つたのである。

卒直にいへば、日本と支那の軍事行動が北支から上海に飛んで戰線が異常に擴大していつた際、日本の國民の大部分が内心考へたことは、事變は恐らく敵の首都南京の陥落をもつて終局をつげるであらうといふことであつた。或ひは更にそれより以前、例へば上海戰線の最後の防禦戰であつた嘉定――南翔の線が綜崩れとなつた時、支那側は早くも降服してくるかも知れぬと觀察した向きもあつたほどである。事實、國家の政治・經濟・軍事・文化の中樞部たる首都が陥落した後まで對手國がなほ敵對行動をつゞけるといふことは、普通の戰爭の常識では到底考へられないことであるから、かうした『日支事變は南京陥落まで』といふ豫想が生れたこと

も無理はないのである。

が、事態はかうした豫想を裏切つて、南京を捨てた國民政府は依然として長期抗日をその中樞標語として活躍をつゞけてゐる。國民政府は既に周知の如く、上海—南京を結ぶゼークト・ライン（獨逸のゼークト將軍が築いた堅陣）が日本軍の猛攻撃の前に崩壞するや、政府の諸機關を揚子江奥地の重慶、長沙、漢口に移してしまつた。尤も南京陷落が支那側に與へた精神的物質的打擊は蔽ふべくもない事實である。その打擊の第一は、戰塵收まつた北支の人心が決定的に國民政府を離れてしまつたことである。その具體的な現れとしては、北京に中華民國臨時政府が堂々と樹立されたことである。これによつて抗日支那は完全に二分されてしまつたわけだ。第二には、上海—南京間の攻防戰において蔣介石はその優秀な直系軍の多數と精悍な廣東、廣西軍を失つてしまひ、到底從來のやうな大規模な抵抗をつゞけることができなくなつてゐる。第三には、多數のストック軍需品と莫大な戰費が失はれ、殘つた軍隊の士氣の粗惡と相俟つて支那側の軍事行動は、到底從來の如き頑强さを示すことができなくなつてゐる。

これらの打擊は蔣介石自身も認めてゐる。彼は十二月廿三日漢口でドイツの新聞記者と會見し、南京脫出以來最初の對外的聲明をなして次のやうに語つてゐるのである。

『支那は歷史上未だ曾て見ない大打擊をうけたが最後まで抵抗せんとの統一意思には何等の變りもない。軍隊の消耗もまた甚大であるが、その補充には少しの困難も覺えない。』

と、相かはらずの强がりを繰返した後、今後の抗日戰術についての質問に對しては

『大規模抵抗の戰術を更め、小規模かつ頻繁なる遊擊戰法を採用することになつた。』

更に『軍需品の補給はどうするか』といふ問ひに對しては

『(一)安南より雲南、(二)ソ聯より新疆、甘肅の二つの徑路によつて武器補給は何等の困難を感ぜず、現に安南方面よりは數百臺のトラックをもつて軍需品が輸入されており、他方四川より甘肅を經て直接ソ聯に通ずる近代的軍用道路の構築も目下盛んに進捗中である。』

と述べてゐる。

蔣介石のこの公式の言葉を果して額面通りに受け通つても差支へないものかどうかについて

は、なほ論議の餘地もあることであらう。然しこの中には二つの見逃すべからざる事實がある。その一つは、蔣介石が大規模な近代的戰術を斷念して、從來つねに中國共產黨が提唱してきたパルチザン式の遊擊ゲリラ戰術を遂に採用したことである。第二は、ソ聯との密接な相互關係を公然と斷言したことである。

第一のゲリラ戰術の採用は、その反面において國民政府が次第に近代統一國家の政府としての實力と權威を失つてゐることを物語るものではあるが、またその反面中國共產黨の政府部內における指導力を認めて飽迄コミンターン式の彈力性のある戰術をもつて細く、しかし長く抗戰しようと決意したことを意味するのである。特にこのゲリラ戰術は第二のソ聯への關係の强化と相まつて、支那をして益々日本との和平交涉を斷念させることにならう。

事實、國民政府のかゝる方針を裏書する情報は、屢々わが國にも傳へられてゐる、その情報を極めて簡單に列擧してみよう。

一、日本海軍航空部隊が十二月中旬蘭州飛行場—新疆から西安に通ずる所謂コミンテルン・ルート要所—を襲つた際、多數のソ聯製飛行機が地上に待機しており、かつソ聯製戰鬪機が海軍航空部隊に立向つてきた。

一、ゲリラ戰術の採用と共に漢口の作戰本部では、まづ向ふ二ケ月間に殘軍と新規に廣東、廣西兩者で徵募しつゝある新兵との大改組を行ひ、共產黨の首腦部周恩來、葉劍英らにこれを指導せしめ共產軍兵力と混成して前線各地に分散配置、遊擊戰術をもつて戰はしめることを正式に決定した。

一、國民政府內の親ソ派の巨頭で立法院長孫科を駐ソ大使として派遣する。

一、ソ聯から支那に派遣された新大使オレルスキー氏は、眞の外交官畑の出身ではなく、それにソ聯大使館には最近外交に擬裝した軍事の專門家が多數入りこんで支那側の要人と盛んに行ききしてゐる。

かうした諸事實をみただけでも抗日支那が事變の進行とともに、如何に中國共產黨並にソ聯と接近してゆき、日支間の和平交涉の機會を自ら放棄してゐるかといふことが解るのである。

かくて南京陥落を契機として第二期戰に入つた支那事變の前面には、中國共産黨とソ聯の戰略並に實力がその前面に現はれてきたのであるが、さらにこの事態の複雜化に拍車をかけるものは、國民政府が漢口、重慶、長沙に移轉したことによつて生ずる日英關係の錯綜化である。イギリスは日本軍の上海攻略戰においても、例へば上海南市の支那敗殘兵の處置において日本側に好意を示さなかつたのであるが、香港を中心とする南支那においてはさらに日本との對立關係を尖鋭化する傾向にあるとみなければならぬ。イギリスの南支における勢力と權益は牢固たるものがあるのであるが、支那との軍事行動がこの南支に足場をおいて行はれる以上、日本とイギリスの關係はより複雜化してくることは當然だからである。事實又支那側がその外交機關を漢口に置いたことは、この南支におけるイギリスの勢力と外交的にも、軍事的にも密接な連絡を保たうとする目的から出たものであることは否定できない。

こゝにおいて支那事變の第二期戰は、日本と中國共産黨、ソ聯、さらにイギリスとの眞正面からの對立關係を織りこむことになり、兎に角表面では蔣介石の國民政府だけを對手にしてゐたかのやうにみえた第一期戰より、遙かに量要な段階に入つたとみるべきであらう。しからば日本は、そして日本の軍部は果たしてどこまで暴支膺懲の師を進めてゆくのであらうか。

二、大本營設置と日本の對支根本方針

昭和十二年七月七日、北京の郊外蘆溝橋で日本軍と抗日の宋哲元麾下の第廿九軍とが衝突して所謂北支事變（後では支那事變と改稱）が勃發した際、日本政府のとつた對支方針は周知の如く現地解決、事件不擴大の方針であつた。この方針のため現地の當局も、また政府當局も大いに骨を折つたのであるが、長い間國民政府の抗日侮日の政策に訓練された支那軍並に支那大衆は遂に現地協定を無視して事變をかくの如く擴大する諸種の要因をつくりあげてしまつたのである。事變發生以來の諸々の經過を回顧することは、こゝでは許るされないが、また必要でもないが、この間近衛首相から再三發表れさた『不擴大主義方針の一擲、長期抗戰の覺悟』の

聲明、または談話をもう一度回顧しておきたい。

その要旨は、日本としては南京政府がその抗日・侮日の政策を變更せざる以上斷乎として最後まで膺懲するといふこと、日支間の交渉には第三國の介入を許るさないといふこと、日本は東亞の安定勢力として支那の容共政策は絶對に許し難いといふこと等々を述べたものであつた。この徹底膺懲の帝國の決意と方針が、端的に具體化されたものが大本營の設置である。

最初大本營が設置されるといふ情報が傳はつた時には、この問題に關し幾多の不安と懐疑の念が一部の間に流布された。それは大本營の設置によつて日本に『×政府』が樹立されるのではないかといふ心配であつたが、これは大本營の性質そのものに對する誤解からきたものである。大本營は純然たる統帥機關であつて決つして行政機關ではないのである。これは大本營の設置と共に、大本營陸海軍本部當局談の形式で發表された文中に次のやうにあるのをもつても理解される。

『(前略)即ち大本營の設置は專ら統帥大權の發動に基き平時統帥部と陸海軍省とに分掌せらるる統帥關係事項の處理を一元化するを本旨とする純然たる統帥の府にして、之が設置により統帥と國務との職域、責任の分界に何等の變化を生ずるものに非ず(中略)』

然し大本營の設置によつて日本は、支那側の長期戰に備へて用兵作戰の徹底的な本格的運用を期することを中外に宣明したこととなり、從つてこの大本營と關聯して國內・國際の政治も純戰時體制に入つた譯である。そしてこの軍事・政治の諸機構の强化によつて對支政策の全成果を完全にかつ効果的に確保せんとするものである。

日本の抗日支那に對する大方針がかくの如く大本營の設置によつて明確にされた以上、まづこゝで誰れにでも豫想されることは、日本は蔣介石政權、特に最近の如く公然と中國共產黨並にソ聯と結合せる國民政府の再起力を徹底的に粉碎するため凡らゆる政治的軍事的行動をとるであらうといふことである。事態がこゝまで進展してきた以上は、蔣介石側にも既に妥協の意見も、またそのキツカケもないであらうし、日本もまた政府を信賴してゐる日本の國民にも妥協の氣持など介入する餘地はないからである。こゝには日本と支那との間の徹底的抗戰よりほ

か存しないやうに思はれる。

日本がその軍をどこまで進めるかは、容易に豫想を許るさないし、また輕々しく揣摩臆測すべきことではない。日本軍が現在占領してゐる支那の地域は、河北、察哈爾、綏遠、山西、山東、江蘇、浙江、安徽の八省に跨つており、支那海岸封鎖線を勘定に入れるとその範圍の尨大なることは、到底日清、日露兩役の比ではない。イギリスの或る新聞はこの日本軍の神速果敢な行動を批評して『日本はその胃袋の消化力以上の御馳走を獲得した。今後の日本のその消化こそ見物である』云々といふ意味のことを述べてゐた。が、これは日本の方針の東亞における時代的意義を知らないものの言である。日本は支那における領土的野心のため兵を進めてゐるのではない。また再三日本政府によつて聲明された如く、日本は決つして第三國の支那における權益を奪ふために支那と戰つてゐるのでもない。支那の容共政策、抗日政策の勢力を打倒するためである。そして東亞の天地に暗澹として存在する容共政策對防共政策の對立を、後者の勝利において清掃するためである。かゝる意味から考へれば、この事變は、五年十年と放任し

ておいたなら恐るべきものとなつてゐたであらう。國民政府の容共政策、抗日政策をその芽のうちに刈り取る日本の聖戰といへる。從つて日本は、いゝ加減な妥協を許さずに徹底的な戰鬪を展開するだらうとみるべきである。何故なら單に算盤の上から勘定しても、妥協して大きく育てあげてから戰ふよりも、小さい芽のうちにつみとつた方が費用も少なくて濟むからである。事實、日本軍の杭州占領の報が傳はつた前後から早くも漢口、廣東では、支那側自身の手で要人の家族に對する避難命令、外國人の退去懇請が行はれた。十二月廿二日香港發の同盟通信の電報によると廣東市では支那軍の抗戰準備が盛んに行はれ、廣東軍當局では『廣東最後の時に至れば家屋や食糧品を燒却すること』を市民に命令し、各戸に石油を用意せしめ全市を一擧に灰燼に歸せしめんとする作戰をとつたと傳へられてゐる。さらにまた同日の香港發の同盟通信の電報によると、蔣介石は同廿一日宋美齡夫人、何應欽、陳誠らを隨へて廣東にやつてきて、廣東軍當局の余漢謀、吳鐵城らと重要軍事會議を行ひ、その會議の結果廣東市一帶の民衆を武裝動員するため各市民にその財力に應じて外人會社から小銃彈藥などの武器を購入させる

一方各戸に食糧品の貯藏を行はせ、持久抗戰の準備を急ぐことになつたといはれてゐる。漢口に强力なトーチカその他の防禦準備を急いでゐることはいふまでもない。

このほか廣西省、福建省でも各軍當局が大規模な新兵の徵募、訓練を行つてゐるとの情報は、殆ど毎日の新聞にみるところである。そして遷都後の國民政府は、かゝる軍事的用意と呼應して政治的經濟的立場からする中南支、並に奥地支那の中央統一化に汲々として盡力してきたのである。卽ち國民政府の前實業部長吳鼎昌を貴州に轉じて貴州、雲南方面の開發と英佛屬領への交通路、運輸路の開拓を行はしめ、蔣直系または中央軍領將たる顧祝同、黃紹雄、蔣作賓、何成濬、張治中らを長江流域の重要省たる江蘇、浙江、安徽、湖南各省の首席に任じたのである。またこれより先、蔣介石は蘆溝橋事件突發直後の七月中旬、時局の重大の折にも拘はらず軍政部長の何應欽を重慶に派遣して、天然の資源に富んだ四川省の政治・軍事の中央化を工作したのであつた。

國民政府のかゝる福建、廣東、廣西、貴州、四川、雲南各省を地盤とする抗日戰線のための政治的經濟的軍事的活動は、必然的に日本の軍事行動を刺激して戰鬪の舞臺が南支一帶にまで擴大發展してゆくことを暗示するものである。繰返していへば、われわれはこゝで日本軍の取るであらう、或ひはとるかも知れぬ作線の方向または範圍について揣摩臆測して何ごとかを云々しようといふものではない。ただ現在の支那側の戰意とその頑强なる戰鬪準備よりみて、そこには何らの妥協の色を發見することができず、飽迄日本軍が現在確保せる南京—杭州を結ぶ線に對して抗戰的な陣地を構築してゐる以上、徹底的な國民政府の膺懲の大方針からすれば日本軍の南進は當然可能なるものとして豫想し、日本の國民はそれに應じた心構へをもつべきであると思はれるのである。事實、わが國の一部の論者の間には、『先づ蔣介石政權の再起力を擊碎するため更らに對支膺懲の歩を進めて、徹底的に國民政府に打擊を與へなければならない。宣戰布告もよろしい、ともかく戰局を更に展開して何處までも國民政府の陣營を襲ひ、且、後方連絡路を遮斷することによつて、その武力を掃滅する必要がある。その結果は英露兩國によつて行はれる後方援助を阻止するため、宣戰布告によつて兩國の國旗にかくれて輸送される武

器を差しおさへる必要もある。ともかくいたづらに政治工作をいそぐよりも、先づ、支那の再起力に對して致命傷を與へることが絶對的に必要である。』（田知花信量氏）とする意見が相當有力に行はれてゐるのである。

南京―抗州を結ぶ江南戰線を守る日本軍の戰線に支那軍が反擊してくることは容易に考へられない。が、客觀的情勢の變化如何によつては、日本軍が直ちに漢口、長沙、廣東に南進しなければならぬ危機と可能性はみち溢れてゐるのである。そして國都を失つた後までもなほかうした抗戰的體勢を、例へそれが弱々しい消極的なものであれ、相手國に示し得るところに實際支那の持殊性があるのである。さらにまた、こゝに支那側でいふところの長期抗戰の不可思議な意味があるのである。

三、長期抗戰とは何か

或る人が支那を評して『支那は下等動物のやうなものであるから、その身體の一部分を切り取られても平氣で生存することができるのだ。』といつたことがある。實際、支那は既に事實上二分されてゐる。一つは北京の中華民國臨時政府の勢力と威信の及ぶ範圍であり、一つは未だ國民政府の勢力と威信の及んでゐる範圍である。それに日本軍の宣撫工作の結果、上海、南京にも反國民政府的な自治委員會が支那の民衆自身の手で早くも誕生しようとしてゐる。これらの反國民政府的な政治組織、それに引き續く經濟的財政的諸活動が國民政府の力を弱めるものであることはいふまでもない。特に從來國民政府の財政的支柱をなしてゐた上海との連絡が日本軍の手で切斷され、關稅收入―國民政府の歳入の大部分をなしてゐた―が全然なくなつたこと、さらに浙江財閥との關係が切れたことは、國民政府にとつては非常な傷手であつたに違ひないのである。が、それでも未だ蔣介石の國民政府は生きており、日本の弱いながらも一敵國をなしてゐるのである。そして依然として『長期抵抗』を唱へてゐるのだ。

この秘密はどこからくるか。支那は圖體の大きい下等動物だから、一部分を切斷されても息

づいてゐることができるといふ見方も、非常に抽象的ではあるが或る程度正しい見解である。が、勿論この見方だけでは未だ十分とはいへない。事實、國民政府がいま尙ほその統一を失はずに長期抗戰を唱へ得る力は、內と外の二つの方向からきてゐるのである。まづ支那內部に殘つてゐる。『長期抗日力』の諸要素から檢討してゆかう。

最初支那事變の初めの間、多くの有力な支那通たちは、事變の進展と共に蔣介石はその政權を擁護するため抗日民族戰線の急先鋒である中國共產黨に對しクーデターを斷行して日本と和を講ずるであらうとか、或ひは廣東の白崇禧などが蔣介右の敗戰の責任を問ふて打倒蔣介石政權の內亂を起し、支那は再び四分五裂の昔の狀態に歸るだらうとかいふ見透しをつけてゐた。然しそのいづれも當らなかつたこれは蔣介石の政策の巧みさにもよるのであるが、また一面中國共產黨の戰略の巧みさにもよることであるが、まづ第一の根本的な問題は揚子江流域にある民族資本と所謂支那大衆の抗日運動と國家統一運動の力である。

蔣介石は日本の『强さ』を十分知りぬいてゐた。支那の近代的に裝備された軍隊が如何に支

那では自慢の種であつても、世界に誇るべき日本軍の敵では到底あり得ないことを知つてゐたそれで蘆溝橋事件が突發して支那が日本と一戰すべきであるか否かを決する最後の關頭にたつや、蔣介石は一戰を交へた場合當然くるであらう支那側の敗北を見越し、その際の責任を全部の共同負擔とすべく支那全體の政治、軍事、財政、文化各界の有力者を集めて最後の判斷をこの全體の會議によつて決する仕組みをとつたのである。特にそれまで反蔣介石派の有力な領將であつた廣東、廣西の白崇禧、李宗仁らをも辭を低くゝして南京に迎へ入れたのである。さらに四川の劉湘、湖南の何健などもこの對日開戰に際しては、その協力を求められたのである。そのため現在の如き『支那史上未曾有の打擊』をうけたにも拘はらず、誰れ一人として敗戰の責任を蔣介石に問ふものはゐないのである。かくの如き全國的な軍事行動の統一は、却つて蔣介石の重みを加へたとも逆にいへるのである。

さらに共產黨との關係に至つては、現在のところ所謂國共合作（國民政府と中國共產黨との妥協）は益々强化されてゐるとみるべきであらう。共產黨側が國民政府の事變に際してとつた

戦略戰術について諸種の批判を行つてゐることは事實であるが、この批判とて國民政府自身の崩壞や打倒を目指したものではなく、その戰線強化のためなされてゐることであつて、國民政府もできるだけ共産黨側の代表者周恩來、毛澤東らの發言を重要視するやう務めてゐるのである。これが前述した如く今後の抗日戰略をゲリラ戰に置くことになつた所以でもある。

從つて蔣介石を首班とする國民政府は地方領將との關係においても、さらにまた中國共産黨との關係においても決つして何らの破綻を來しておらず、日本軍に追ひつめられながらも結局殘された領域においては却つて從來よりも一段とその統一力を強化してゐるとみるべきであらう。そしてこの國民政府の抗日戰略を絶對に支持してゐるのは、現在においては重慶を中心とする四川、廣東を中心とす南支那の抗日意識に鍛へた民衆と土着の民族ブルジョアジイである。もつと端的にいふことが許されれば、蔣介石政權は南支那、四川を中心とした地域にその足場を求めたため却つて永い間の抗日排日の意識に燃へてゐるこれらの民衆の壓力によつて遂に日本との和平交渉のキツカケを失つてしまつたともいへるのである。

事實、南支並に四川省一帶は支那におけるは排日主義の本場であるといへる。尤もこの地域一帶は必らずしも排日主義に始終してきた譯ではない。最初この地域一帶に目ざめた民族獨立運動はその中樞目標を排英主義においてゐた。廣東で獨立運動の旗をあげた孫文の目標は、イギリス帝國主義の打倒といふことであつた。四川においても猛烈な排英運動が展開されたものである。孫文、それに引きつゞいた蔣介石らの北伐革命運動が武漢政府を樹立した前後が最もこの排英運動が盛大を極め、隊に民衆の力で漢口の英租借地は浚收されてしまつた。其後蔣介石が政權を握つて日本と平和的な交渉を續けるやうになると共に、廣東、廣西の白崇禧、李宗仁らは蔣介石打倒の政略的立場から最も强硬な排日主義を唱へてきたのである。

かゝる南支一帶並に四川一帶の民衆の中に根ざす排日主義、民族獨立運動が今後蔣介石の長期抗日に拍車をかける內部的事情であるが、これらの地域一帶のもつ特殊な外國關係もまた蔣介石の長期抗日の重要な支柱である。それは地圖をひもとけば直ちに諒解されることであるが、廣東はイギリスの極東政策の足場である香港をすぐ前に控えており、四川はソ聯の勢力下にあ

る新疆に接し、廣西は佛領印度に隣りしてゐるのである。

ソ聯がその國家の存在の上から中國共產黨を援助することは當然のことであらう。また國家の性格、方向、組織、政治、經濟等の根本的性質において自國とは鋭く對立してゐる日本の戰鬪力が、この支那事變によつてできるだけ多量に消耗しかつ國力が疲幣することを望んでゐることは自明のことである。さらにまた日本の軍事行動が四川にまで及び新疆の境界線まで日本の勢力が押し寄せることを極力防止することも、また當然考へられることであらう。そのためには重慶まで追ひつめられた蔣介石を極力援助することは、理の當然である。また逆にソ聯との關係を重視した蔣介石が、抗日の大本營を重慶に移つしたことはソ聯のかゝる立場と照し合はせれば意味深重なものがある。

これと同じ事情のもとにあるのがイギリスの立場である。イギリスは揚子江流域と南支一帶に莫大な權益をもつており、さらに蔣介石政府が支那を統一するために行つた諸事業に多額の借款を貨付けてゐる。特に蔣介石がその財政的基礎を確立するために行つた幣制改革には莫大

な資金を融通して、南京政府とは密接な經濟的關係を結んだのである。かゝる財政的經濟的關係においては、イギリスがソ聯よりも遙かに特殊な、そして緊密な關係を支那にもつてゐるのである。しかも蔣介石政府並に南支一帶の廣東、廣西の諸領將たちが日本軍を漢口、廣東に邀擊しようといふ準備をしてゐる以上、イギリスが日本の進攻に對し無關心でゐられないのは勿論のこと、非常にその成行きに焦燥を感じてゐることは容易に理解できよう。イギリスとしては飽迄蔣介石政權を維持して南京政府と契約した諸種の權益を存續させてゆく一方、日本軍の破竹の勢をもつて行はれるであらう南進をできるだけ香港より離れた北部において防止したいのである。この意味でイギリスがソ聯と同樣に蔣介石の抗日戰線をできるだけ强化するやう武器の輸出、資金の援助を行ふことは當然豫想すべきことであり、また事實においてさうしたことが行はれてゐることも確かである。香港の埠頭には武器彈藥が山のやうに積まれてゐるといふニュースや、孔財政部長がイギリス政府と事變費二千萬ポンドの借款を締結したといふ情報は、いづれもかうしたイギリスの意圖を裏書きするものである。

蔣介石がドイツの新聞記者に豪語した『長期抵抗』の力は、この内外の二つの要素である。

從つて問題は、南支一帶の抗日力は果たしてどれだけあるかといふことはソ聯とイギリスはどこまで支那を援助するかといふことであるが、問題をギリギリの所までつめてゆけば後方が前の方よりも遙かに重要であると思はれる。といふのは、既に支那は北支と上海を失つてそれ自身の力は相當に減退してゐるからである。それに實際のところ支那が上海戰線で示した軍事的實力は、蔣介石のもつてゐた力の最高の表現であつて、中南支一帶の防禦陣地も、またそこに動員される支那軍隊も決つして上海戰線のそれには及ばないとみるべきであるからである。勿論中南支一帶の抗日勢力を侮るべきではないが、假りにいまこゝでソ聯、イギリスの對支援助が突如、何かの事情で中絶したとしたら蔣介石も決つして『長期抗日』をしかく豪然とは斷言できないだらうといふのである。この意味では支那の長期抵抗の最後の據りどころはソ聯とイギリスの對支援助にあるといへるだらう。

四、英ソは日本と正面衝突をするか

支那の長期抵抗の最後の據り所がイギリスとソ聯の對支援助にあるとすれば、日支事變は單に日本と支那の問題ではなく、世界の強國たる日本とソ聯並にイギリスとの問題である。そして蔣介石政府と中國共產黨並に廣東、廣西派の大同團結による抗日戰線が、揚子江流域の漢口、武漢、重慶、さらに廣東方面に集結されて日本軍に挑戰してくれば、必然的に日本とソ聯、イギリスの對立關係もそれだけ拍車を加へられるわけであるが、果してソ聯とイギリスは日本と正面衝突する力や意圖をもつてゐるだらうか。このことは勿論輕々しく豫斷すべきことではないが、支那事變の終局を明らかにするためには是非ソ聯とイギリスの動向を明らかにしておかねばならない。

ソ聯の對支武器援助が南京の陷落後目立つて著るしくなつてきたことは既に述べた。さらに

或る情報によると蔣介石の密使はモスクワ當局と懇談の結果、外蒙赤色軍を日本軍の前面に向つて南下させる協定の締結に成功したと傳へられてゐる。ソ聯が果たして虎の子のやうに大切にしてゐる外蒙軍を日本軍と激突させるか如何かは甚だ疑問であるが、新疆と奥地支那を結ぶ第二コミンテルン・ルートの開拓に必死の工作をつゞけてゐることは事實である。然しこのルートは天嶮と沙漠の難所が隨所に横たはつてゐて、大仕掛けの武器輸出は不可能とされてゐるそれで傳へられるやうにソ聯の大砲、小銃、彈藥が多量に支那に入つてきてゐるといふことは軍事專問家の間では否定されてゐるが、飛行機の輸出は相當行はれてゐるとみるべきであらう。さらに新任大使オレルスキー氏を中心としてソ聯の多數の軍事指導家、政治指導家、莫大な軍事・政治資金が蔣介石政府の中に入りこんできたことも事實である。漢口、廣東には數十名のソ聯飛行士が待機の姿勢で頑張つてゐる。支那事變の勃發當時、大いに活躍したボゴモロフ駐支大使、南京大使館付武官レービン少將が事變の中途において突如罷免されたことについては種々の臆測が行はれてゐるが、兎に角新大使オレルスキー氏の漢口入りが蔣介石らの大歡迎をうけると共に、今後ソ聯の對支援助は益々積極化するとみるべきであらう。

近衞首相は『ソ聯の動向で最も注目すべき時期は來年（昭和十三年）の三月前後ではあるまいか』といふ意味のことを述べられたやうであつた。それは丁度その頃ソ聯では新憲法によつて選出された代議員の大會があり、また第二次五ヶ年計畫が終るので國内の情勢の見透しがつくが、若し國内の肅清工作がなほ前途遼遠であるといふ感じが濃厚であればソ聯は乾坤一擲の氣持で國内紛爭に大膽に乘りだすのではないかともみられるからである。と同時に、支那事變をその頃まで引きのばすことに成功すれば日本の國力も相當疲幣するといふ見透しをつけてゐるのかも知れない。然しソ聯としては國内の肅清工作とは別の立場から、日本がこの事變を契期としてイギリス、アメリカ、フランスらとの對立を激化してその間に大きい戰爭でも起ればもつけの幸ひであるといふ方針をとるのではあるまいかその爲にもソ聯が支那事變を國際的にできるだけ紛爭させるやう努力するであらうことは見易い道理である。事實、ソ聯はイギリスの召集した九ケ國條約會議にも、この條約とは全々關係がないのに列席して諸列强の對日感情

を惡化させるやう大いに奔走したのであつた。

ソ聯は自分から日本と正面衝突することは敢へてせず、中國共產黨の壓力で蔣介石を最後まで抗日に踊らせるとしても、イギリスの立場は必らずしもソ聯と同一ではない。イギリスとしては蔣介石が抗日のため戰つて日本の勢力を中南支から驅逐したり、或ひは國民政府の有力な條件によつて和平交渉ができたりすることは（若しそれが可能であれば）非常に望んでゐるのであるが、蔣介石政權が跡かたもなくなる程どの纖滅的打擊をうけたり、支那がソヴェト化することは好まないのである。これはイギリスがソ聯と違つて支那並に蔣介石政府に對し莫大な投資をしてゐる關係からであるが、こゝにイギリスの對支援助の限界があるとみるべきである現在イギリスは未だ蔣介石政府のもつてゐる統制力を信賴して香港を中心に對支援助を畫策してゐるが、事實或る機會を捉へて日本と支那の居中調停を試みないとも限らないのである。元も子もなくすよりは、弱々しいながらも蔣介石政府を生きのばしておくことは何んといつてもイギリスの利益だからである。

然しイギリスの居中調停も戰線が既に南支に移つた以上、最早そのキッカケを失つてしまつたので、イギリスとしても飽迄日本の勢力を南支から追ひ拂ふべく蔣介石に援助する一方自分でも敢然立つて戰ふだらうと見る向きがない譯ではない。事實日本軍の米艦射擊事件でアメリカの輿論が沸騰した時には、イギリスはこれ幸ひとアメリカに對日共同行動を積極化するやう大いに誘ひかけたのである。そして現在イギリスのヨーロッパにおける大きな重荷となつてゐる地中海問題についても、フランス側と數次折衝の末、若しイギリスがその主力艦隊を東洋に派遣する場合にはフランス艦隊が地中海を守備してイタリーを牽制するやう協定したのである。かうした動向からみればイギリスとしては、支那事變については相當積極的な決意をしてゐると見ても差支へないやうであるが、イギリスの海軍はその主力艦隊を例へ東洋に派遣しても單獨では到底日本の艦隊の敵でないことを知り拔いてゐる。恐らくその主力艦隊の運命は日本海々戰におけるロシアの艦隊の運命と同じことになるだらう。

イギリスはそのため必死となつてアメリカとの共同行動をとるやう諸種の工作をしてゐる。

イギリスとしても日本とソ聯の間に戰爭が勃發してお互ひが疲弊するなら、それに越したことはないのだろうが、ソ聯が積極的に日本と開戰しない以上、結局アメリカを誘つて例へ直接行動に訴へないとしても經濟封鎖、軍需品の輸出禁止等の手段をもつて日本の對支行動を牽制するやう凡ゆる手段をとるだらう。イギリスの居中調停のキツカケが既にないとすれば、イギリスとしてはこのアメリカ工作に縋るよりほかない譯であるが、アメリカは必らずしもしかく簡單にイギリスと同じ行動をとるもとは思へない。然しアメリカが支那事變に對し重要な鍵の一つを握つてゐることは事實である。

五、戰はこれからである

アメリカの對日輿論が日本軍の米艦パネー號爆沈事件の報に相當硬化したことは事實であるが、これも日本側の調査とアメリカ海軍側の調査が合致して、全然故意のない過失であつたことが判つたのでアメリカ政府當局もまた輿論も沈靜に歸した。現在ではイギリスのアメリカに對する對日共同行動の勸誘も失敗に歸してしまつたといへよう。これはアメリカの國民が戰爭を欲してゐないといふことからばかり結果したことでなく、日本のこの事件に對する誠意ある陳謝とさらに支那事變に對する日本の第三國介入を許るさゞる斷乎たる決意が自然とアメリカの輿論に反映したためであらう。

事實、日本はこの支那事變に對しては第三國の介入を許るさないのみならず、いゝ加減な調停や妥協は決つして受付けないだらうと思はれる。持に北支における新政權—中華民國臨時政府が堂々と出現した今日においては、この政府の方針や政策の線に沿つて支那が動いてゆくよう努力するだらうし、またさうすべきであらう。

その爲にはまづ蔣介石政府をぎりぎりの所まで追ひつめる一方、蔣介石勢力が既に及ばなくなつた上海を含む南京—杭州の線以東の住民の反蔣的意圖や停戰意圖を纒めてこの地域一帶の建設事業が開始されるだらう。この工作は相當進展してゆくに違ひない。上海一帶の支那民族

ブルジョアジイは、この事變のためその資財を五六割から七八割まで失つたといはれてゐるが彼らも蔣介石の抗日政治の厭力がなくなれば昔日の繁榮を取り戻すべく、中華民國臨時政府と歩調を併せてゆく可能性は多分にもつてゐるからである。かくて日本はその戰果を北支から中支にと收めてゆき、眞に東亞の安定勢力としての確乎たる地位を築きあげてゆく譯である。

が、この反面土壇場まで追ひつめられた蔣介石一派は、從來の財政的基礎を失ふと共に益々ソ聯への依存を深めることになる惧れがある。持にアメリカの勸誘に失敗した形にあるイギリスが、次第に日本に對する反撥力を失つて東洋から後退してゆけば、賴みの綱は新疆を通じてくるソ聯の勢力だけとなるからである。從つてこゝに注意すべきは、蔣介石政權が愈々左翼的に變化してゆき、中華民國臨時政府に對立して丁度スペインの政府軍對フランコ政權の爭鬪圖が支那においても現出しないとも限らないといふことである。事實、蔣介石政府は現在の分散首都長沙や漢口が日本軍のために陷落したとしても、更に雲南、貴州、四川の奥地に分散首都をつくり、ソ聯の援助のもとに最後まで抵抗を試みるであらうからである。特に中國共産黨の足場である陝西省あたりでは、全民衆の武裝完成してゐると傳へられてゐるのであるから、彼らにとつては有力な逃げ場所に違ひない。勿論、蔣介石政權がそこまで轉落してゆけば、日本としては蔣介石の長期抗日などは對手にせず蔣の勢力の失はれた領域における政治・經濟工作の建設的事業に務むればよい譯である。若し假りにそこまで日本が軍を進めることになれば、彼らの所謂ナポレオンのモスクワ遠征失敗の轍を踏む危險性が多分にある。

が、以上の見透しは最後の最後まで考へたことであつて、それまで行く間には日本側にとつても決して樂觀を許るさない要素が多分にある。それは支那側がイギリス並にソ聯と共同して、上海一帶昔日の持殊的な經濟的繁榮を廣東、香港に移すべく諸種の工作を始めないとも限らないのである。揚子江上流の奥地から切斷された上海は、事實、その富の半ば以上を失ふとさへといはれてゐるからである。イギリスとしては、莫大な投資をおいてはゐるがそれを犧牲にして上海の繁榮の財政的基礎をもつて蔣介石政權の强化のため努力し、日本の疲弊を待つ政策をとらないとも限らないからである。またソ聯としても、今後は新疆ルートの開發のためにはそ

の獨持の計畫經濟をもつて、諸種の工作をつづけてゆくだらう。支那の奥地、南支の富がかくてソ聯とイギリスの手で開發さるゝことになれば、蔣介石の抵抗力は相當强化されるだらう。

いづれにしても蔣介石が徹底的に打倒されない限り支那事變は、異常な困難のうちに膠着する危險性が多分にある。日本軍は勿論その神速果敢な行動をもつて蔣の抗日戰線を擊破してゆくだらうが、眞に戰はこれからであるといふ感が深い。支那自身のもつ奥地南支の抵抗力、それに加はつたソ聯の援助、イギリスの日本と妥協するかに見えながら陰に陽につゞけられる援助を併せ考へると、日本の當面してゐる事態は決つして樂觀を許るさないのである。

そして戰はこれからであるといふ東洋の情勢が、直ちにヨーロッパの情勢に影響して世界全體が險惡な空氣に包まれることを考へれば、支那事變は單に事變で終ることなく、世界的混亂の口火にならないとも限らないのである。

六、聖斷遂に下る

これまで述べてきたことは主として支那側の長期抗日の體勢とそれをめぐるイギリス、ソ聯の對支援助等を包含した所謂客觀的情勢の分析であつた。勿論、日本側のこれに對應する確乎たる對支方針についても言及して國民の覺悟を促してはおいた。が、遂に日本のこの事變に處する根本的な最高方針は、歴史的な御前會議によつて明確に決定されたのである。

即ち、昭和十三年一月十一日、わが對支不動の國策を確立すべき歴史的御前會議は天皇陛下御親臨の下に宮中において嚴かに行はせられたのである。大本營側からは、閑院參謀總長宮、伏見軍令部總長宮兩殿下、多田參謀次長、古賀軍令部次長、政府側からは近衞首相、廣田外相、杉山陸相、米内海相、末次、内相賀屋藏相が參集、さらに平沼樞府議長も御參列申上げた。この歴史的な御前會議において、これより先開かれた大本營側と政府側の數回にわたる連

絡會議、さらに數次にわたる閣議の結果愼重に決定されたわが政略、軍略兩部面の對支方策が議題として重大審議が進められた結果、帝國不動の最高方針が確立された譯である。

今後この最高方針に從つてわが日本軍の作戰行動、並に外交は支那大陸に進められるわけであるが、想ふにこの方針は實に日本の重大決意を中外に示したものであつた。蔣介石政權の抗日作戰は如何なる意味においても許るされないことにならう。さらに一歩を進めていへば、蔣介石政權の土臺骨に喰ひ入つてゐる中國共產黨の存在は徹底的に排擊されることになる。また蔣介石政權を、そして中國共產黨を陰に陽に援助してゐるイギリス並にソ聯のこの事變に對する惡意ある介入も絕對に排擊されることになる譯である。この不動の方針によつて始めて日本は東亞の安定勢力となり得るからである。

世上に日本軍は果たして廣東上陸を敢行するや否やの問題につき諸種の風說が傳はつてゐる。支那側では早くも日本軍の上陸を豫期して廣東省全住民に抗日武裝團の組織を命令し、各戸に武器を購入させ、二百萬の新兵を徵集して馴練してゐるとのことである。

さらにまた世上には日獨伊防共協定の線上にたつドイツの駐支大使トラウトマン氏が蔣介石と對面して、蔣に日本との和平交涉に應ずる意向があるか否か、その際の條件如何を打診してゐるとの情報が傳へられてゐる。蔣が昨年十二月末國民政府を改組して知日派の何應欽その他の要人を重要視し、中國共產黨の領袖を政府の樞要部にもつてこなかつたのは、日本との和平交涉に應ぜんとする下準備であると解するものもない譯ではない。

廣東省全住民の抗日武裝團の組織とは別箇に蔣介石が日本と果たしてトラウトマン大使を介して和平交涉の機運を釀成するか否かは容易に速斷できない。蔣個人の意思がどうであらうとも、蔣の周圍に動く中國共產黨、抗日人民戰線派の勢力は、抗日の一線に動いて既に漢口まで退却した以上、既に相當拔き難きものとなつてゐることは容易に想像されるからである。蔣がこれから抗日勢力を無視し、斷壓して日支提携の方向に進むことは相當に困難であり、かつまたその間には相當の時間と手段を要することであらう。

支那事變の最後のクライマックスは最早われわれの目前に迫つてゐる。日本の決意の前に蔣

が轉向してくるか否か、日本の決意が蔣政權の最後の止めをさすべく敵の豫想せる如く廣東攻擊となつて現はれてくるか否か、この國民的關心がどちらかに決せられる日はも早目前に迫つてきてゐるのである。そして事態の重大性に脅へる必要はないが、常にその最惡の場合を計算の中に入れて覺悟すべきであるとすれば、わが國民は蔣が從來の自分の面子を捨てるよりも、動く周圍の情勢に押されて日本の最後の決意廣東攻擊おも考へてなほ抗日を捨てないと一應みておくべきではあるまいか。その時こそ東亞の情勢は、日本の動向を中軸として新しい歷史的一頁を繰り展げるであらう。

◇編輯室より◇

戰はこれからだと云ふことは耳に蛸の出來る程吾々は聞かされてゐる。吾々は既に長期戰爭を覺悟してゐるのだ、どつち道支那が妥協しないかぎりこの事變は終結するものではないのだがその支那が對日抗戰の一色に塗りつぶされてゐるのだから戰ひが終る筈はないそれもその筈だ。本文にある通り問題は支那の背後にある英ソの動向にあるのだから、それがガン張つてゐるかぎり問題はいつまでも續く。

只それが如何なる時期に、如何なる形態で、どれだけのスケールで行なはれるかに關心があるのだ。だがそれも徐々に國民の前に明らかにされようとしてゐる。

本年初頭の御前會議によつて今後の事變に處する日本の態度は確固不動のものになつたのだ。廣東の攻略！　その後に來るものが何であるかは、云はなくて知れてゐる。昭和十三年は愈々多事である。

斷絕後の飛軍閥を軍部はどう懲罰するか
定價十錢（送料三錢）
昭和十三年一月二十日印刷
昭和十三年一月廿五日發行
著者　大木喬夫
發行人　西牟田重雄　東京市神田區小川町二丁目二
印刷所　大森印刷所　東京市小石川區指ケ谷町一四六
發行所　トップ・ニュース社　東京市神田區小川町二ノ二　電話神田(25)二六四七番

東京鐵道局公認　鐵道保養會（鐵道各驛ホーム・スタンド一手販賣）
鐵道弘濟會新聞部
大取次
菊竹金文堂
大坪惇進堂・新正堂・富田報英堂
川頭春陽堂・大阪屋號・川瀨書店

紳士向新職業

貴方の寫眞を一圓五十錢で

新聞紙四分ノ一頁大に引伸します
額縁付きは八十錢增し

◎最近出征した兵隊さんの寫眞を額にして宝に掲けて置くのが流行しだしました。自分の横顔でも又父母、祖父母の寫眞でも額縁入りにしておくのが大流行です。そこでこの引延を專門にする仕事が出來ました。從來寫眞屋さんにたのむと大判で三圓、五圓はとられます。

◎引き延ばし寫眞はそちらから引き伸したい寫眞を郵便で送つて貰ひ、それを再び種板に撮り、あまり薄ければ手を加へて立派な額用になる引伸し寫眞としてあげます。但し寫眞の黄色くなつて顔も姿も解からぬ樣な寫眞は誰にも直せませんからお斷はります。

◎御希望の方は寫眞に引伸料一圓五十錢に送料十錢、一圓六十錢をお送り下さい。早速引伸してお預りした寫眞と共にお送りします。

◎地方で商賣にしたい方は四圓前後で註文をとの歩いて纏めて下さい。紳士的で手取早く儲かる新職業になること請合です。尙詳しく知りたい方は郵券四十三錢封入申込下さい。之に關する詳細な記事が出てゐます發明之事業十一月號を御送付致します。

東京市小石川西丸町九番地　發明之事業社スタヂオ係　電話大塚(86)二〇三八番　振替東京一三〇二四五番